

平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点
(地理歴史・世界史B)

1. 今回の調査結果のポイント

【ペーパーテスト調査】

＜世界史への扉＞

- 歴史に対する関心を高め、世界史学習への意欲を育てることをねらいとして新設された大項目である。通過率が設定通過率を上回る又は同程度（以下、「と同程度以上」という）と考えられる問題数は5問中3問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。

＜諸地域世界の形成＞

- 通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、13問中12問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。

＜諸地域世界の交流と再編＞

- 通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、13問中10問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。通過率が設定通過率を下回ると考えられる問題の3問中2問はビザンツ帝国と東ヨーロッパに関する問題であった。

＜諸地域世界の結合と変容＞

- 通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、20問中15問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。通過率が設定通過率を下回ると考えられる問題の5問中4問は16世紀から20世紀初期のヨーロッパやアメリカの近代国家形成に関する問題であった。

＜地球世界の形成＞

- 通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、16問中10問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。通過率が設定通過率を下回ると考えられる問題の6問中3問は冷戦の世界的影響に関する問題であった。
- 評価の観点については、いずれの観点においても、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めた。
- 全問題67問中14問の記述式問題を出題したが、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は10問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。

【質問紙調査】

- 「世界史の勉強が好きだ」、「世界史の勉強は大切だ」など、世界史に対する肯定的な回答をした生徒は、前回調査より増加の傾向がみられた。
- 学校図書館を活用した授業、課題解決的な学習を取り入れた授業、観察や調査・見学、体験を積極的に取り入れた授業、及び調べたことを発表させる活動を取り入れた授業の実施について、否定的な回答をした教師の割合は増加の傾向がみられた。
- 大項目「世界史への扉」と「地球世界の形成」については、ほとんどの項目において「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と回答した生徒の割合が「役に立つと思わなかった」と回答した生徒の割合を上回った。また「生徒は興味を持ちやすい」回答した教師の割合が「生徒は興味を持ちにくい」と回答した教師の割合を上回った。

2. 今回の調査結果の特色

(1) 現行の高等学校学習指導要領（平成11年告示）の改訂の要点等

平成11年告示の高等学校学習指導要領・地理歴史では、従前の基本的な科目構成を維持しつつ、各科目の特質を生かして内容を厳選するとともに、各科目で主題学習による内容を工夫し、また科目内で内容を選択して学習する仕組みを一層拡充して重点を置いて学習できるよう工夫している。

「世界史B」については、地域世界別の構成を採用し、世界史全体を「諸地域世界の形成」、「諸地域世界の交流と再編」、「諸地域世界の結合と変容」、「地球世界の形成」の4期に区分して、それぞれの時期に最も重要な役割を果たした地域世界の動向に着目させるようにした。また、主題学習の充実を図るために、大項目「(1) 世界史への扉」を新設し、また、大項目「(5) 地球世界の形成」の中の「エ 国際対立と国際協調」、「オ 科学技術の発達と現代文明」、「カ これからの世界と日本」も主題学習を行う項目として位置付けた。

こうしたことから、従前と比べて科目の内容が異なっており、教育課程全体の変化と相まって、各学校における生徒の履修状況も異なって来ていることが考えられるため、前回調査と同一問題の結果をみる際には留意する必要がある。

(参考) 履修学年

調査年度(科目名)	1学年	2学年	3学年	1・2学年	1・3学年	2・3学年	1・2・3学年
平成15年度(世界史B)	12.0%	32.5%	15.1%	7.0%	1.6%	29.9%	1.9%
平成17年度(世界史B)	13.0%	30.7%	15.1%	4.5%	1.9%	29.5%	5.3%

(2) ペーパーテスト調査結果の主な特色

① 過去同一問題についての分析

前回調査(平成15年度調査)との同一問題は67問中14問を出題しており、通過率を比較すると、前回は有意に上回るものが2問、前回と有意に差がないものが12問、前回は有意に下回るものは無かった。

全問題数	同一問題数	前回は有意に上回るもの	前回と有意に差がないもの	前回は有意に下回るもの
67	14	2<14.3%>	12<85.7%>	0<0.0%>

前回は有意に上回る2問は、金印に関する資料を読みとる問題[A2](3)と中国文化の影響を図版から読み取る問題[A4](1)であり、いずれも「資料活用の技能・表現」に関する問題である。ただ、前回と有意に差はないものの、依然として通過率が設定通過率を下回ると考えられる問題が4問あり、また、無解答率は13問において増加している。

② 内容の項目別にみた分析

全体としては、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、67問中50問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。内容別の状況は以下のとおりである。

内容	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
(1) 世界史への扉	5	2<40.0%>	1<20.0%>	2<40.0%>
(2) 諸地域世界の形成	13	7<53.8%>	5<38.5%>	1<7.7%>
(3) 諸地域世界の交流と再編	13	6<46.2%>	4<30.8%>	3<23.1%>
(4) 諸地域世界の結合と変容	20	4<20.0%>	11<55.0%>	5<25.0%>
(5) 地球世界の形成	16	5<31.3%>	5<31.3%>	6<37.5%>
合計	67	24<35.8%>	26<38.8%>	17<25.4%>

＜世界史への扉＞

「(1) 世界史への扉」は、身近なものや日常生活にかかわる事柄から世界史を考えた
り、身近な地域の歴史や我が国の歴史の中に世界史とのつながりを見いだしたりすること
によって、歴史に対する関心を高め、世界史学習への意欲を育てることをねらいとして、
現行学習指導要領において新設された大項目である。通過率が設定通過率と同程度以上
の問題数は、5問中3問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。世界史について
関心をもち、イラストから追究したいことを具体的に判断させ記述させる問題 [A1
(3)] も、設定通過率65%に対して通過率が82.8%と大きく上回っている。正答の傾向
をみると、調べたい主題では「占い」、「ヘアーカット」、「図書館」、「銀行」の順に多く
みられ、調べたい内容については、最も多かった「占い」を例に挙げると、その発生の
時期や場所、理由、創始者などの「起源」が最も多く、続いてその種類や方法などの「内
容」、そして違いや他との関係、変化などの「比較」や「変遷」、いくつかを組み合わせた
解答など、追究の度合いがより高度になっているものもあった。

＜諸地域世界の形成＞

「(2) 諸地域世界の形成」は、人類の誕生、農耕・牧畜の始まり、都市文明の成立を
経て、西アジア・地中海、南アジア、東アジア、内陸アジアの諸地域に、それぞれの自然
に対応して独自の世界が形成されていったことを把握させることをねらいとした大項目で
ある。通過率が設定通過率と同程度以上の問題数は、13問中12問であり、全体の問題数
の半数以上を占めている。

中項目「ア 西アジア・地中海世界」では、4問すべての問題について通過率が設定通
過率と同程度と考えられる。

中項目「イ 南アジア世界の形成」では、通過率が設定通過率を上回ると考えられる問
題数は、5問中4問であり、全体の問題数の半数以上を占めているが、ガンダーラ美術
に関する問題 [B2(3)] では、通過率が設定通過率を下回ると考えられるだけでなく、
無解答の割合も43.5%と高い。

中項目「ウ 東アジア・内陸アジア世界の形成」では、4問すべての問題について通過
率が設定通過率と同程度以上と考えられる。

＜諸地域世界の交流と再編＞

「(3) 諸地域世界の交流と再編」は、古代の西アジア・地中海世界に代わって、新た
にイスラーム世界とヨーロッパ世界が形成されていく過程を概観させるとともに、イスラ
ームの成長が各地の都市を結ぶネットワークの整備を促し、諸地域間の交流を活発にした
こと、またそうした中から台頭したモンゴルの動向がユーラシア諸地域の再編に及ぼした
影響などを把握させることをねらいとした大項目である。通過率が設定通過率と同程度
以上と考えられる問題数は、13問中10問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

中項目「ア イスラーム世界の形成と拡大」では、4問すべての問題について通過率が
設定通過率と同程度以上と考えられる。

中項目「イ ヨーロッパ世界の形成と変動」では、通過率が設定通過率と同程度以上と
考えられる問題数は、5問中2問であり、全体の問題数の半数に満たない。中でも、ビ
ザンツ帝国の文化的特徴に関する問題 [B3(1)] と東ヨーロッパの民族の活動に関す
る問題 [B3(5)] では、いずれも通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

中項目「ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界」では、4問すべての問題について通過率
が設定通過率と同程度以上と考えられる。

＜諸地域世界の結合と変容＞

「(4) 諸地域世界の結合と変容」は、16世紀から20世紀初期にかけての世界の動向を
扱い、いわゆる大航海時代を契機に諸地域世界の交流がユーラシア規模から地球規模へと
拡大したこと、資本主義を確立したヨーロッパの進出により、世界の構造的一体化が進展

し、各地で社会の変容が促されたことを理解させることをねらいとした大項目である。通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、20問中15問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

中項目「ア アジア諸地域世界の繁栄と成熟」では、4問すべての問題について通過率が設定通過率と同程度と考えられる。

中項目「イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界」では、通過率が設定通過率と同程度と考えられる問題数は、4問中2問であり、全体の問題数の半数を占めているが、ルネサンスに関する問題 [A5] (1)] とヨーロッパの経済活動に関する資料を読み取る問題 [A5] (3)] では、いずれも通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

中項目「ウ ヨーロッパ・アメリカの変革と国民形成」では、通過率が設定通過率と同程度の問題数は、5問中3問であり、全体の問題数の半数以上を占めているが、ヨーロッパ・アメリカの成立について、フランス革命の歴史的意義に関する問題 [B5] (1)] は設定通過率50%に対して通過率28.4%と下回り、誤答の中には「人権宣言」の条文を「権利の章典」などと解答したものが45.0%みられ、無解答率も26.7%であった。また、アメリカの西漸運動に関する問題 [B5] (3) ①] も、設定通過率40%に対して通過率29.4%と下回り、無解答率も32.4%であった。

中項目「エ 世界市場の形成とアジア諸国」では、3問すべての問題について通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる。

中項目「オ 帝国主義と世界の変容」では、通過率が設定通過率を上回ると考えられる問題数は、4問中3問であり、全体の問題数の半数以上を占めているが、ヨーロッパ諸国による植民地化に対するアジア・アフリカの対応に関する問題 [B6] (2)] では、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

<地球世界の形成>

「(5) 地球世界の形成」は、第一次世界大戦から現在に至る歴史的過程を概観させ、20世紀の歴史の特質を考察させるとともに、未来を展望させることをねらいとした大項目である。通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、16問中10問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

中項目「ア 二つの大戦と世界」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、4問中3問であり、全体の問題数の半数以上を占めているが、第二次世界大戦の基本的性格に関する問題 [A7] (3)] では、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。誤答では、連合国に含まれない国として、ソヴィエトや中国を選択した生徒が42.6%と目立った。

中項目「イ 米ソ冷戦と第三勢力」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、4問中1問であり、全体の問題数の半数に満たない。冷戦下におけるアジア・アフリカの動向に関する問題 [B7] (1) ①], [B7] (1) ②], [B7] (2)] は、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

中項目「ウ 冷戦の終結と地球社会の到来」では、通過率が設定通過率を上回ると考えられる問題数は、2問中1問であるが、冷戦の終結に関する問題 [A8] (1)] では、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

「エ 国際対立と国際協調」、「オ 科学技術の発達と現代文明」、「カ これからの世界と日本」は、いずれも適切な主題を設定し、主体的な追究を通して生徒に未来を展望させる中項目である。通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、合わせて6問中5問であり、問題数の半数以上を占めている。資料からの読み取りを批判的に吟味する技術を問う問題 [A9] (1)] においても、通過率は設定通過率を設定通過率50%に対して、通過率76.4%と上回ると考えられている。

③ 評価の観点別にみた分析

評価の観点別に通過率と設定通過率を比較すると、いずれの観点においても、通過率が

設定通過率と同程度以上と考えられる問題が半数以上を占めている。観点別の状況は以下のとおりである。

評価の観点	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
関心・意欲・態度	25	9<36.0%>	9<36.0%>	7<28.0%>
思考・判断	16	6<37.5%>	4<25.0%>	6<37.5%>
資料活用の技能・表現	19	8<42.1%>	8<42.1%>	3<15.8%>
知識・理解	32	10<31.3%>	14<43.8%>	8<25.0%>

(注) 複数の評価の観点にまたがる問題があるため、前記の表の問題合計数と異なる。

世界史Bの「関心・意欲・態度」の観点は、「世界の歴史の大きな枠組みと流れに対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会に主体的に生きる国家・社会の一員としての責任を果たそうとすること」を趣旨としている。「関心・意欲・態度」の観点に関する問題では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、25問中18問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

「思考・判断」の観点は、「世界の歴史から課題を見だし、文化の多様性と現代世界の特質を世界的視野に立って多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断すること」を趣旨としている。「思考・判断」の観点に関する問題では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、16問中10問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

「資料活用の技能・表現」の観点は、「世界の歴史についての諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用することを通して歴史的事象を追究する方法を身に付けるとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現すること」を趣旨としている。「資料活用の技能・表現」の観点に関する問題では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、19問中16問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。資料からの読み取りを批判的に吟味する技術を問う問題 [A9] (1) においても、設定通過率50%に対して、通過率76.4%と上回っている。

「知識・理解」の観点は、「世界の歴史についての基本的な事柄を、我が国の歴史と関連付けながら理解し、その知識を身に付けていること」を趣旨としている。「知識・理解」の観点に関する問題では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、32問中24問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

④ 問題形式別にみた分析

問題形式でみた場合、全問題67問中14問の記述式問題を出題したが、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題の合計数は、10問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

⑤ 現行学習指導要領において重視している点や前回調査で課題とされた内容との関連

現行の高等学校学習指導要領（平成11年告示）の世界史Bでは、地域世界別の構成を採用し、世界史全体を「諸地域世界の形成」、「諸地域世界の交流と再編」、「諸地域世界の結合と変容」、「地球世界の形成」の4期に区分して、それぞれの時期に最も重要な役割を果たした地域世界の動向に着目させるようにし、また、大項目「(5) 地球世界の形成」の中の「エ 国際対立と国際協調」、「オ 科学技術の発達と現代文明」、「カ これからの世界と日本」も主題学習をおこなう項目として位置付けることによって、歴史的思考力を身に付けることを一層重視している。

今回の調査結果では、主題を追究させる学習に関する問題として、例えば、世界史について関心をもち、追究したいことを具体的に判断させ記述させる問題 [A1] (3) や 歴史的

事象に関心をもち、日本で暮らす外国人についての資料を読み取る問題 [A9] (1)] などでは通過率が設定通過率を上回ると考えられるが、第二次世界大戦後の独立国の増加について考察し判断する問題などでは通過率が設定通過率を下回ると考えられる状況もみられた。

前回の調査結果では、基本的な事項の理解などを課題として挙げ、人名、事項名等を羅列的、網羅的に教えるのではなく、現代の視点に立って歴史とその意味をとらえさせ、前近代、近現代ごとに内容を重要な事項に重点化し、指導計画を適切に作成して、理解の徹底を図ることが重要であると提言している。

今回の調査結果では、前回調査と同一問題のうち「知識・理解」に関する問題では、全8問が前回の通過率と有意に差がなかった。しかし、依然としてガンダーラ美術に関する問題 [B2] (3)] では設定通過率50%に対して通過率33.9%、西ヨーロッパ成立に関する問題 [B3] (2)] では60%に対して通過率45.8%という結果であり、基本的な事項の理解に課題がみられる。

⑥ 国際調査との比較

OECD の生徒の学習到達度調査 (PISA2003) では、資料等の「連続テキスト」や地図・年表・グラフといった「非連続テキスト」を理解し、利用し、熟考する力である「読解力」に課題が指摘されている。③の評価の観点と単純な比較はできないが、本調査における「資料活用の技能・表現」や「思考・判断」の観点に関する問題では、それぞれ設定通過率と同程度以上と考えられる問題が半数以上であった。

一方、PISA2003では、記述式の問題において無解答率が高い傾向がみられたが、本調査でも、例えば、絵画資料からアメリカの西漸運動を読み取る問題 [B5] (3) ①] では、無解答率が32.4%と高い傾向がみられた。

(3) 質問紙調査の結果の概要

① 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査については、「世界史の勉強が好きだ」、「世界史Bの授業がどの程度分かりますか」、「世界史Bの勉強に関することで、分からないことや興味・関心をもったことについて自分から調べようとしていますか」といった世界史への興味・関心・理解に関する肯定的な回答、及び「世界史の勉強は大切だ」、「世界史を勉強すれば、私の普段の生活や社会生活の中で役立つ」、「世界史を勉強すれば、私は、社会の一員としてよりよい社会を考えることができるようになる」といった世界史の有用性に関する肯定的な回答は、いずれも割合が増加している。また、それらのうち「世界史の勉強は大切だ」以外については、否定的な回答の割合も減少している。

世界史への興味・関心・理解及び有用性についての意識

質問事項	肯定的な回答の割合	否定的な回答の割合
「世界史の勉強が好きだ」	45.5%<42.6%>	50.1%<52.0%>
「世界史の勉強は大切だ」	53.0%<51.6%>	40.1%<39.9%>
「世界史の勉強は、入学試験や就職試験に関係なくとも大切だ」	46.4%<45.8%>	45.3%<44.7%>
「世界史を勉強すれば、私の普段の生活や社会生活の中で役立つ」	35.1%<33.8%>	56.1%<56.4%>
「世界史を勉強すれば、私は、社会の一員としてよりよい社会を考えることができるようになる」	40.9%<38.4%>	48.2%<48.8%>
「世界史Bの授業がどの程度分かりますか」	36.7%<35.4%>	33.1%<34.7%>
「世界史Bの勉強に関することで、分からないことや興味・関心をもったことについて自分から調べようとしていますか」	36.2%<33.9%>	63.1%<65.1%>

※< >内は平成15年度調査結果

② 教師質問紙調査

教師質問紙調査については、「観察や調査・見学，体験を積極的に取り入れた授業を行っていますか」に対して肯定的な回答をした教師の割合が増加しているが、「学校図書館を活用した授業を行っていますか」，「課題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか」，「調べたことを発表させる活動を取り入れた授業を行っていますか」に対して肯定的な回答をした教師の割合はいずれも減少している。また同時にその割合も低い。これらの学習についてはいずれも否定的な回答の割合も増加しており，またその割合も高い。

世界史学習の指導状況

質問事項	肯定的な回答の割合	否定的な回答の割合
「学校図書館を活用した授業を行っていますか」	5.3%<9.1%>	94.7%<89.9%>
「課題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか」	12.8%<17.7%>	87.0%<81.5%>
「観察や調査・見学，体験を積極的に取り入れた授業を行っていますか」	4.3%<3.5%>	95.5%<94.9%>
「調べたことを発表させる活動を取り入れた授業を行っていますか」	4.9%<8.2%>	95.1%<91.1%>

※< >内は平成15年度調査結果

③ 生徒質問紙調査と教師質問紙調査との比較

内容の理解や有用性について，生徒質問紙調査の結果と教師質問紙調査の結果を比較すると，状況は以下のとおりである。

項目	生徒の回答 (%)						教師の回答 (%)				
	よく分かった	よく分からなかった	好きだった	きらいだった	普段の生活や社会の中で役に立つと思った	役に立つと思わなかった	生徒にとって理解しやすい	生徒にとって理解にくい	生徒は興味を持ちやすい	生徒は興味を持ちにくい	
(1)	ア 世界史における時間と空間	16.6	46.6	17.9	40.0	27.6	29.1	13.4	36.0	43.1	25.3
	イ 日常生活に見る世界史	24.2	35.1	28.1	30.5	29.9	26.5	36.2	4.6	77.8	4.6
	ウ 世界史と日本史とのつながり	21.8	39.7	25.9	33.9	29.3	27.7	27.9	13.4	63.8	12.1
(2)	ア 西アジア・地中海世界の形成	23.3	43.3	28.4	37.4	17.2	39.6	41.0	22.3	53.6	14.3
	イ 南アジア世界の形成	19.8	45.7	21.6	40.3	16.8	39.2	18.9	43.4	19.1	47.8
	ウ 東アジア・内陸アジア世界の形成	18.9	47.0	20.9	43.2	18.4	38.1	38.2	19.3	54.8	15.8
(3)	ア イスラム世界の形成と拡大	18.1	47.9	19.8	42.5	17.5	39.0	11.1	58.6	19.3	40.9
	イ ヨーロッパ世界の形成と変動	22.4	42.7	27.6	36.2	17.7	38.1	28.8	33.6	36.8	27.3
	ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界	16.2	47.9	17.1	43.2	15.8	39.1	12.9	52.6	19.6	40.2
(4)	ア アジア諸地域世界の繁栄と成熟	17.2	45.6	17.6	41.8	18.8	35.9	14.3	46.2	19.5	41.9
	イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界	24.6	39.5	30.6	33.8	20.2	35.8	49.8	9.4	67.7	5.4
	ウ ヨーロッパ・アメリカの変革と国民形成	24.9	39.2	28.9	34.0	25.5	31.4	33.9	20.7	72.6	5.9
	エ 世界市場の形成とアジア諸国	17.0	46.0	18.6	39.3	19.2	34.5	10.4	49.7	16.8	46.8
	オ 帝国主義と世界の変容	19.3	41.9	20.5	36.4	21.3	32.1	21.3	42.8	33.4	28.4

項目		生徒の回答 (%)						教師の回答 (%)			
		よく分 かった	よく分 からな かった	好きだ た	きらい だ	普通の生 活や社会 生活の中 で役に立 つと思っ た	役に立つ と思わな かった	生徒にと って理解 しやすい	生徒にと って理解 しにくい	生徒は興 味を持 ちやすい	生徒は興 味を持 ちにくい
(5)	ア 二つの大戦と世界	24.3	35.6	25.7	31.5	31.8	23.9	29.0	27.6	62.2	10.2
	イ 米ソ冷戦と第三勢力	21.9	37.6	22.6	33.6	30.7	24.6	17.4	42.4	41.3	23.9
	ウ 冷戦の終結と地球社会の到来	20.1	37.6	20.8	33.4	31.5	23.4	14.2	45.1	37.0	29.0
	エ 国際対立と国際協調	21.2	37.0	22.4	32.0	38.6	20.0	19.4	31.3	49.3	19.4
	オ 科学技術の発達と現代文明	16.3	39.6	18.7	32.9	35.7	20.5	17.1	23.4	42.3	31.5
	カ これからの世界と日本	17.1	38.6	20.3	32.1	39.7	18.6	15.5	24.3	36.9	35.9

「(1) 世界史への扉」では、中項目の「日常生活に見る世界史」、「世界史と日本史のつながり」において、「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と回答した生徒の割合が「役に立つと思わなかった」と回答した生徒の割合を上回っている。また、これらの項目については「生徒にとって理解しやすい」「生徒は興味を持ちやすい」と回答した教師の割合も「生徒にとって理解しにくい」、「生徒は興味を持ちにくい」と回答した教師の割合を上回っている。

「(2) 諸地域世界の形成」、「(3) 諸地域世界の交流と再編」、「(4) 諸地域世界の結合と変容」では、すべての中項目において「よく分からなかった」、「きらいだった」、「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思わなかった」と回答した生徒の割合が「よく分かった」、「好きだった」、「役に立つと思った」と回答した生徒の割合を上回っている。

「(5) 地球世界の形成」では、すべての中項目において、「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と回答した生徒の割合が「役に立つと思わなかった」と回答した生徒の割合を上回っている。また、これらの項目については「生徒は興味を持ちやすい」と回答した教師の割合も「生徒は興味を持ちにくい」と回答した教師の割合を上回っている。

現行学習指導要領における世界史Bでは、旧学習指導要領から中項目の数を25項目から20項目に再構成したが、「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と回答した生徒の割合が「役に立つと思わなかった」と回答した生徒の割合を上回っている中項目が、前回の5項目から8項目に増加している。これらの8項目は、主題学習を行う項目及び現代史を扱う項目であり、主題学習の充実と近現代史の重視を図った現行学習指導要領の下での指導の改善成果が現れていると考えられる。

3. 今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点

○ 世界史を学ぶ意味を実感させる指導の一層の充実

生徒質問紙調査の結果から、「世界史の学習が大切だ」に対して肯定的な回答の割合は半数以上であったが、「入学試験や就職試験に関係なくても大切だ」では肯定的な回答と否定的な回答がほぼ同じ割合であり、さらに「世界史を勉強すれば、私の普段の生活や社会生活の中で役立つ」に対しても否定的な回答の割合が半数以上で、前回調査より改善の傾向がみられるが、世界史を学ぶ意味を実感させることが依然として課題である。

また、各項目に対する「役に立つと思った」と回答した割合をみると、「(1) 世界史への扉」や「(5) 地球世界の形成」に関する内容については比較的高い傾向であったが、これら以外の項目では否定的な回答の割合が高い結果であった。

こうしたことから、新設した「世界史への扉」にとどまらず、科目の学習全体を通して、

生徒に世界史を学ぶ意義・意味を実感させ、生徒の興味・関心を育てていくことが大切である。例えば、世界地図や日本史との関連がわかるよう日本史年表を常に利用し、生徒に確認させながら授業を行うとともに、生徒の興味・関心を引き出すために、新聞、雑誌、インターネットなどのメディア、生活用品やその他さまざまなものを活用し、生徒に具体的な時代や地域のイメージを描かせるなど、指導の工夫が必要である。

○ 生徒に主体的に学習させる指導の充実

ペーパーテストの結果から、「資料活用の技能・表現」や「思考・判断」の観点に関する問題では、それぞれ設定通過率と同程度以上と考えられる問題が半数以上であったが、資料から読み取ったり、考察し判断する問題などで無解答率が高いものもみられた。

現行の学習指導要領では、主題を追究させる学習や、歴史的思考力を身に付けることを重視しているが、生徒質問紙調査の結果では、世界史Bの勉強に関することで、自分から調べようとしたり、学校図書館やインターネットを活用して資料を集めたりしている割合が低く、授業でテーマを設けて調べたり、議論したり、レポートにまとめたり、発表したりすることが好きだと回答した割合が非常に低い結果であった。一方の教師質問紙調査の結果でも、学校図書館を活用した授業、課題解決的な学習を取り入れた授業、調べたことを発表させる活動を取り入れた授業について、行っていないと回答した割合が高く、前回調査より増加している。

こうしたことから、指導計画の作成にあたって、主題を設定し追究する学習を適切に位置付け、作業的・体験的な学習を取り入れ、学習活動を工夫していくことが必要である。

○ バランスのとれた年間指導計画の作成

現行の学習指導要領では、世界の大きな流れを把握させるために必要な基本的な事項・事柄を中心に指導内容を構成し、歴史的思考力を培うことをねらいとしている。このため、細かな事象や高度な事項・事柄に深入りしないようにするとともに、政治史のみの学習にならないよう、指導上の配慮を求めている。教師質問紙調査の結果から、各項目に対する指導時間の配分がばらつきがあることがうかがわれるが、各項目の指導が不十分になることがないよう、バランスの取れた指導計画を作成・実施することが必要である。

また、指導計画作成に際して、「関心・意欲・態度」、「資料活用の技能・表現」、「思考・判断」、「知識・理解」の各観点バランスよく育まれるような学習活動、これらの観点を適切に評価できるよう、ペーパーテストだけではなく、観察、面接、質問紙、ノートやレポートの提出、発表などの評価方法も指導計画に位置付け、実践を通して工夫改善していくことが必要である。